



大本山永平寺



葉月の夜に

毎年、八月の後半の日曜日には、ここ福井を代表する河川の一つである九頭竜川にて、大燈籠ながしが行われます。初回から十年を越えた今、この燈籠ながしは、永平寺町だけでなく、福井を代表する大きな催し物となり、当日は日中から地元物産品を売る店が軒を連ね、また盛りだくさんのイベントなどが開かれて、県内外から訪れた多くの方々で大変賑わいます。訪れた方々の大多数は、願い事やご各家のご先祖さまのお名前が書かれた灯籠を寄進され、それを置く壇上は、毎年約一万個の灯籠でいっぱいになります。

永平寺の修行僧も、当日の夕刻に現地へ赴き河川敷に特別に設置された会場にて、お施食をおつとめさせていただきます。日が落ちて暗くなった特設会場は、一〇〇人を越える僧侶の唱えるお経の声と姿により、正に幽玄としか言いようがない荘厳な雰囲気になります。

その後、主催者の代表と永平寺の代表である監院かんにんにより川面に静かに灯籠が流され、続いて参列者により火が灯された一万個の灯籠が九頭竜川を埋め尽くします。そして、それはあたかも一匹の大きな竜のごとく、川面を静かに流れていくのです。この催しが終わると、短い北陸の夏は終わりを告げ、一気に紅葉の秋に季節が移っていきます。



大本山總持寺



真夏の修行僧

總持寺では七月がお盆の月にて、旧盆の今月は多くの修行僧が師寮寺（師匠のお寺）の補佐で他出（帰省）し、さしもの大伽藍も文字通りガラン堂となります。特に、今春上山の修行僧にとっては初めての他出となり、たくましく成長した姿を御本師や御寺族、お檀家の方々に見ていただく良い機会でもあります。

旧盆が終わり、それぞれの修行僧が他出から戻ってくると、本山は再び活気に溢れます。

ところで、夏は草がよく生えます。本山では除草剤を用いず、ひたすら草むしりに精を出します。また、落葉の掃き作務（掃除）や廊下の雑巾がけなど、広い境内を清浄に保つために毎日の作務が欠かせません。

作務では先輩僧も後輩僧も一緒になって汗を流しますが、途中の休憩でいただくお茶やお菓子は、何とも言えない格別な味わいがあります。

また、今月下旬は「祖蹟巡拜」が行われ、御開山瑩山さま・二祖峨山さま縁の地や寺院を訪ねます。この巡拜で修行僧は曹洞宗や本山の歴史を学び、御開山さま・二祖さまをより身近に感じ、その教えが脈々と自分たちに相承されていることを実感するのです。

曹洞 俳壇

選・村松五灰子

ばうたん
牡丹のしづけさにあり髪を梳く

愛知県 田中 澤子

評 奈良時代、唐より渡来したといわれる牡丹。美人を形容する喩えに「座れば牡丹」という。その壮麗な花の静かな佇まいの中、髪を梳く。五七五をもって日本画を描くような作者の技量は見事。

耳よりな艶めく話古茶のこく

東京都 伊奈 三郎

評 新茶も古茶も初夏の季題である。耳よりなニュースを携えて客の訪問である。少々色っぽい噂話のようだ。腰を据えて聞くには古茶をもって良しとする。期待をくすぐる一句である。

◆ 芹を摘む八十路諾ふ今日のあり

千葉県 鈴木 英子

◆ 先急ぐ歩き遍路に風そよぐ

愛媛県 能仁めぐみ

◆ バイバイと別れたきりの朧かな

神奈川県 小橋 幸

◆ 廃坑にワインの眠るおぼろ月

宮城県 木村とみ子

◆ 定年や妻に春眠贈りたる

三重県 山下 利夫

◆ 手作りの鉢に寄せ植ゑ立浪草たちなみそう

東京都 榎本由美子

◆ 出世には縁なき背広土用干し

秋田県 小田篤恭葉

◆ 耳しひに鶯声を張りにけり

北海道 大野 節子

◆ 口笛は頻伽びんがの声の春の唄

秋田県 柴田 和書

◆ たんぼぼの中の一株白が浮く

愛知県 小久保左門

*選者吟

先生に会ひたくなつて慕参り

五灰子

*作句小見

花火の季節である。夜空を打ち破るかの大音響の打ち上げ花火の醍醐味は胸がすく。その瞬間の映像は印象深い。また家族と共に庭やペランダでの手花火も心の故郷として生涯残つたりする。

そんな一句ができたらと思う。

曹洞歌壇

選・長澤 ちづ

心処の闇ぎしぎしと鍋・釜を磨きて晴るる
ものにもあらず
東京都 長谷川 瞳

評 鍋や釜を磨いても心は晴れないが、そうすることで一時の平安は得られている。何気ない日常の行為が、意識しなかった心の闇を覗かせる契機になったとも言える。「ぎしぎし」に現実感がある。

官兵衛と半兵衛の軍師誕生す興味深きは播
磨の歴史
兵庫県 河本佐知代

評 「官兵衛と半兵衛」の詳細は分からないが、リズムの良さが読者を播磨の歴史に近づける。播磨は作者にとって郷土と呼べる地らしい。固有名詞三つが生き生きと躍動している。

◆吹き抜けの階段回廊かけ昇る七堂伽藍合掌しつづ

新潟県 田村 秀広

◆これは灘これは但馬の土産なり遺影の夫が食べ余らせる

三重県 野呂 と志

◆杜若母の好みし白き花短命なりし面影を追ふ

東京都 津久井すみ子

◆肩ゆすりぐいぐいと漕ぐ向かひ風学生服は春突き進む

岐阜県 後藤 進

◆雑木山の模様替えなす藤の花木々の枝巻き紫の波

静岡県 西下 とよ

◆凶鑑手に野花確かむ人生の放課後の二人あれだこれだと

岩手県 池田 眸

◆こころ放ちただぼう然と居るもよし黄花明るし菜畑の夕

長野県 毛涯 潤

◆ほら鳴いた妻の声にて耳すます吾が耳に未だ届かぬ初音

新潟県 星野 三興

◆濃く浅く流るる霧は山袂をくきやかにして浅春の朝

福井県 三浦 豊子

◆山菜の日替りメニューでのむ湯割り掘りし野蒜を今日は

三重県 小阪 晋

酔味噌で

*選者詠

春^に楡の若葉が隠す鳥影を目に追いながら風
になるわれ
ちづ

*作歌小見

拙歌の気分は、菜の花畑の明るさのなかに我を忘れている毛涯さんの心境に近いものがあるかと思いました。人も自然の一部であることが頻りに思われます。